

荻原の家系

古宿古屋の不動院といわれていたと伝えられていたが古いには古いと思うが確証となるものがなくてはならぬ。

藤原氏の子孫であると言われていた。系図があつたが倒産した折、家財道具と共に借金のかたとして沓掛の長谷川に持ち去られてしまった。

(佐久市旧年根付横根の酒屋の受入(連帯保証人))となりその酒屋が酒造りに失敗倒産、その債務を負う。その為土地、家屋敷は勿論家財も入手に渡る。家をもあけわたさなければならなかった。家の重要なものは長特に納めてあつた。

その中に系図が入っており長谷川家としても他人の系図(姓の異なる)を持っていたも仕方がないという事で、元分家筋の同姓荻原家に売ったと伝えられていた。

近年、荻辰家が立派な墓石を建立した。その時、石碑に刻記された文面を写し取ってみた。荻辰家は分家筋になり真向いの家である。明治に入って子供がなくて両養子を迎え(辰次氏)、荻原との血縁は切れる。当時、村会議員となり羽振りをきかせており、万屋(今中軽)、荻原分家(明治中期沓掛に越す)の爺さんが「長谷川で荻原の系図を売ったらしいがどうする」と相談したことがあると伝えられている。

人皇四十一代

藤原四代末流 天正元年信濃国古宿郷

開発住居ス 有故 荻原姓改

同姓甲斐國 荻原郷北墨川郷生其後武田信虎公家臣二而荻原常陸号ス信虎八十一才天正二年(1574)逝去

浪人二

而信陽佐久岩田郷二而常陸守七三才二而牟同邑ク子イト云地名有シ所住居

嫡男 左近

二男 右近

三男 道静

此れが系図と云われていたものの写しの一部であろうか。

(元禄銘石塔)

我が家の歴史は、東と西の二箇所にあつた墓地の石碑より判明出来たもののうちで、年月日は元禄五年銘が一番古く、その他判読不能、崩れた石碑三基ほどであり、名前没年のはっきり判るものは、享保20年からである。併し古文書は延宝、貞享、元禄時代の日付けの書き物が残っており、「年貢覚書、塩野村の事、中山道沓掛橋往還掛け直し書」、などがあるところをみても、当時地域の有力な役職をしていたことが判り、又、街道が制定された当初から、この地に住んでいたことの証でもある。

(中山道 沓掛宿往還 橋掛け直し入用帳)

(修験者 御條目帳 佐久・小県 中老 不動院)

1690年元禄3年修験道三個の大事、1713年当山宗門御修目写し等の古文書は、修験者であったことを表し、小県佐久、中老不動院とは、小県佐久の郡長格を表わす(水沢邦嵩氏談)人がいた事であるという。

修験者としての免許状その他の許状なるものが神殿に保管(北西の隅にあった為火災時に焼け残った)されていた。其の中で宝暦年間の、栄運氏の物が一番多く残っており、修行場所、上野国群馬郡、箱田邑(東橋村)錫杖山普門寺で修行したり、渋川、威徳山真光寺(関東五山の一寺)で僧侶職を行った記録、また大阿闍梨職の許状、衣冠、装束、院号等、全ての許状等があり、当時の修験道制度を知る事ができる。

(桐・菊 紋章入り 漆塗り 免許入れ木箱)

(大阿闍梨職 血脈 灌頂 許状)

(印信傳授修了証)

インターネットによると

荻原常陸介昌勝は山本勘介と並び称される軍略家であり武田信虎、信玄に武術を教えた勇者であり、信玄が武田家の家督を継いだ裏には、重臣板垣と荻原がいた、とさえされる程だが、何故か、武田24将にも選ばれなかったのは、信玄の時代ではなく、信虎時代の臣であったから、ではないかとされている。

武田とは、我が家と借宿行田との3代に亙る縁組を考察しても、関係があったような気がする(行田六三郎談 元名字帯刀を許された武田の臣である行田であると、常に自慢話しにしていた)。

荻原家には神棚の外、家の北西の隅に神殿があった。その前に物置があり、古文書が一杯入っており、「すぐ」祖母さんが健在のころには毎年虫干しをし、大切に保管していたが、祖母さんは既に亡くなり、太平洋戦争の始まった頃、物資が乏しく、古文書は立派な和紙でできていたので、再生紙としての価値が高かった。

豊次は古文書等には割合無関心で、只管農業一途であった。当時は、家族の寝る場所もない位、家中蚕を飼っており、そんな物を後生大事に持っているより、その分、蚕でも余分に飼った方がよほど経済の足しになる、との事で屑屋に売り払ってしまった。

座敷の縁側につまれた古文書は見事なもので荷車一杯になった。その車を屑屋が小僧と二人掛で我が屋敷から持ち去っていった。

この時、長姉幸子はおすぐ祖母が、大事にしていたのをみて育った関係もあったでしょうが、本当におとなしい筈の姉が、父豊次に絶対に売らせまいとして、反抗していた姿が私の記憶の中に鮮明に蘇ってくる。

どのような書き物があったかは今となっては解らないが、家系を知る手掛かりになる書き物でも、無かったかと思うと、惜しい事をした思いがある。

母屋の東南に隠居家(現記念館跡)があり、それを壊した時、屋根裏に、米俵に入っている古文書があった。昭和30年代頃だと思うが、軽井沢町で町史をつくりたいということで調査に来たことがある。

その時貸して欲しい(借用書あり)とした数点の古文書が町資料館にあるが、その他、残ったものは昭和51年の火災により、ほとんど灰塵に帰してしまった。僅かに焼け残った古文書や、石碑等から判明したものを、書き出したので我が家の歴史の参考ともなれば幸甚である。

1675年 延宝3年 塩野村の事、町資料館

1684年 貞享元年 年貢覚書 庄屋甚〇

1690年 元禄3年 修験道三箇の大事

1692年 元禄5年9月25日 不明

1713年 正徳3年 町資料館

当山宗門御條目写

小県佐久二中老不動院

八月中山道沓掛橋往還掛け直し入用目録

1716年 享保1年町資料館

土地田畑名寄帳

預り御貯麦事

1729年 享保12年

田畑名寄帳

畑八反八畝分十五斗六升

下田四町六反四畝十歩三七石一斗六升

1735年 享保20年10月25日

栄進 没権大僧都栄進法印、不動院

1742年 寛保2年7月16日

補佐 三僧紙職之事袈裟院号織

権大僧都、錦地職、今性坊、常秀院栄順

1759年 宝暦9年2月23日

道秀信士 没

1760年 宝暦10年7月23日

阿開梨職信州佐久郡沓掛村常秀院

栄順今性防 不動院

1779年 安永8年4月29日

栄順 没 権大僧都大阿闍梨栄順

1762年 宝暦12年11月
上州渋川威徳山真光寺大阿闍梨職
三昧、血脈、印信、印塔、権律師
僧綱職、権大僧都 栄運
1771年 明和8年7月16日
補任袈裟寶山房龍生院
1802年 文化3年9月11日
大阿闍梨栄運
栄運 没
1778年 安永7年7月16日
院号龍泉院袈裟龍宝房
1781年 天明元年7月16日
袈裟錦地 院号不動院一乗房
1798年 寛政10年7月16日
院号天王院
1800年 寛政12年7月26日
権大僧都職輕井沢宿天皇院
1801年 文化2年7月18日
権大僧都職 不動院寛了
1802年 文化3年7月18日
泰麟房
1818年 文政1年7月8日
錦地職 権大僧都院号不動院
阿闍梨職袈裟龍元房祐教
1837年 天保8年6月2日
寛了 没 大河阿闍梨 寛了
1842年 天保13年8月27日
祐教 没 権大僧都大阿闍梨金剛祐教法印
1871年 明治4年8月16日
奈加77歳 没

たまたま、祐教氏の香典帳があり、それによると沓掛宿の殆んど全部の人が葬儀に来ており(馬取萱から多勢来ている。なんらかの関係があったのではと思われる)

(祐教香典帳)

この時代を推察するに寛了、祐教と続く大阿闍梨の、偉大な影響を受けていた時であったからと思う。沓掛宿宿割帳や家並調帳などに関する重要書類が2つも残っていることを考えても、宿の支配的役職を勤めていたことを、証明する事に外ならない。

(家並調帳)

1849年 嘉永2年7月16日

袈裟、宝全房、院号不動院、錦地職の事

1857年 安政4年

巡礼八十八番、石碑建立(寛了妻奈加)

前庭の露地木の下に街道に面して四国八十八ヶ所巡礼の記念の石碑が建てられており、寛了、妻・奈加これを建つとなっている。此の時は水杯を交わして旅立ったと言い伝えられている。遠い四国まで長い月日をかけて巡礼の旅に出る。

途中、病気等の事故により帰ってこられないかも知れない。何故そんな危険を冒してまで行ったのか。荻原案が養子を迎えていると伝えられているが、それがいつ頃なのか、又誰であったのか不明である。この巡礼がそれを解き明かす鍵を持っているとも思える。なぜかといえば寛了さんの子供である祐教さんに、妻なる人が見当たらない。多分早死にし、その母である奈加さんが、その供養のために四国八十八ヶ所、巡礼の旅に出たものと思う。

養子は分家筋の万屋から来たと伝えられている。多分能信ではないかと思う。

慶応4年、明治の時代を迎え、神仏分離令や、廃仏毀釈があり、いよいよ修験道という仏教の道は、閉ざされるに至り神主に転向する。

能信～能均と。

(子供 虫封じ 竹筒 大勢来た)

(神主 木沓)

(御神符 印)

(浅間神社の版木)

(神官の祝詞教本)

能均の代に神官業を止め、大和の屋号で炭商いを行う。浅間の裏から上州人が、馬の背に炭を乗せ運び、其の中継基地、問屋的存在で手広く商売を行った。

火災前(昭和51年)まで居間にあった、大戸棚の大引出に和紙を厚くとざした、当時の売掛帖なるものが数冊あった。が、火災で焼失してしまい、その規模は知る由もないが、中山道は碓井に新国道が開き、続いて鉄道の開通が早かったため、炭焼き位しか生計の道が無かった。北群馬の人々には此れを足がかりにして、関東方面の街場への販路の道が開け、本当に、ありがたい存在であった。当時の、馬繋ぎの鉄輪等が前庭に面した柱に

残っており、後年(昭和に入ってから群馬から当時、炭を我が家に運んだという老人が訪れてきて非常に懐かしがり、隆盛を極めた荻原家の当時の状況等を語った)、作男をつかい当時の寛治坊ちやまの文学青年ぶり、うらやましかったこと等、其の人は今どうしているか等・・(既に亡くなった後だった)・・・。

他人の土地を踏むことなくずっとよそへいけた。財産家と札言われ、家のつくりには格式を感じさせるものがあり、普通の行商人等は無断で屋敷内へは入れなかったという。

父豊次が晩年、西郷従道公(西郷隆盛の弟で海軍大臣)が浅間山麓へ狩に来軽し、我が家を定宿にしていた、と聞いているけれど何か書いたものはないかといっていた。

(街道わきの露地木)

徳川時代は、中山道等主要道に面した家で道に面して、露地木を植えたり、池を造るということは、普通の家では、身分違いという事で、絶対許されなかったという。歴史に精しい人であれば、庭の樹木を見ただけで、その家の格式のあったことが判るという。屋根は茅葺きであったが、制外屋根といい、神社、仏閣、名主、等で無ければ許可されない造りであり、座敷には通常の入り口と別に入り口があり、身分の高い人は其処から入った、部屋には段差がつけられていた。

家への入り口の川にかかっている石橋は、元中山道の街道筋にかかっていた(西の河)石橋であるという。豊次の保温折衷苗代考案のとき、日本全国から大勢の人が視察や勉強に訪れた。

(豊次 保温折衷苗代の説明しているところ前庭に研修者が座って聞いている)

中山道にかかっている全国の大勢の人が渡った石橋である。その橋がかかっている家だから全国から人が大勢きても不思議でない、と村の古老が言ったという(入り口の川にかかっている3枚の石橋)。

能信が死亡したときの葬儀は樽酒を振舞い、神官が舞いや笛太鼓の盛大なものであったという。

明治26年5月、会葬者もそれなりに大勢であったが、色々の書類等を考察するに、この時が荻原家の最盛期であり、すでにこの辺から没落の兆候が現れてきている。保証人となってやった横根の酒屋が、いつ頃倒産したものか、またその負債はどの位であったのか・・・。

住む家まで失くすほどの破産は、火災のとき只一つ持ち出した当時の借用書によって(これがあるということは、その分の借金は返済済みであるということであるが、金額のわりには、家屋敷と、僅かの土地を取り戻せただけであり、莫大な土地、財産は返って来なかった。いったいどの位の借金を負ったのだろうか)、大変な事であったことを知ることができた。

当時の借用書を見ると、その文面、取り立ての厳しさに驚き、それを乗り切った先祖に頭が下がる思いである。最終的には保証人になってくれる人がなかったのだろう。

借入が能均で保証人が潔との証書がある。

そのときの心境は、いかばかりかと、察するに余りあるものである。

（千が滝たばこ屋前 潔 きみ 武子 さだ子 喬茂 義吉）

潔は、荻原案中興の祖であると常に「とらの」は子供に言ってきかせていた。

何故か寛治の名が少ない。家運の隆盛時に坊ちゃん育ちで成長したため役に立たなかったのではと思う。

（旧家）

（改造後 焼失前旧家）